宗教言語の翻訳 ②

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

原典の蘇生

言語は、錯綜と拡散という性質と同時に、常に変異する特性を併せ持つ。現代に生きる我々が、古典文学を読む場合、現代語への変換なしにはその意味を解することはできない。時間という隔たりによって、そして、われわれが日々、言語を使用することによって、言語そのものにさまざまな変化が生じる。同一の語句であっても古代に生きる人と現代人とでは、その意味と使用は異なる。したがって時代を経た言葉を理解するには、ヤーコブソンが指摘したような「言い換え」という翻訳が必要となる。そのような翻訳は、過去から現代へと流れる時間を軸とする垂直構造の翻訳であり、通時的である。

さらに、同一言語の方言や、異なる言語間においてなされる翻訳は、地域的・文化的隔たりを克服するための翻訳である。そのような翻訳は、同時代において空間的な広がりを持つ水平構造の翻訳であり、共時的である。

そのような通時的・共時的な翻訳の構造は、これまで、全世界に広がる網の目のような言語の諸活動を担ってきた人類の意思伝達の様式そのものに関係しているとスタイナーは指摘する。

> 伝達というもののモデルはどんなものでも同時に、翻訳のモデルである。すなわち、意味を、垂直（継時的）もしくは水平（共時的）に相手に渡すことである。どのような歴史的な二つの時代、どのような二つの社会的階層、どのような二つの地域であろうとも、全く同一のものを表現するために語や構文を用いることはないし、価値評価や推測などについても全く同一の信号を送り出すこともない。また、どんな二人の人間を取り上げてみても、同じ言葉を用いていても意味が同じとは言えないのである。（スタイナー，亀山訳，1999:94）

翻訳は解釈の「選択」でもある。原典の解釈とは、可能性としてある多様な解釈から一つを選択し、目標言語において表現することを意味する。その過程でなされる選択は、恣意的であるとまではいかずとも絶対的に正しい唯一の選択である、という客観的な論拠を翻訳者は持ちえない。したがって、同一の原典であっても、翻訳者によって訳が異なる、あるいは諸言語によって翻訳の意図するところが異なることも当然であろう。

宗教的な原典に対する異なる解釈とその解釈にもとづいた諸翻訳は、原典の品位と翻訳という営為そのものに対する信頼を貶めるものではなく、むしろ、翻訳者の苦悩と葛藤、そして求道の精神の確固たる証であると同時に、同時代的に再生された「聖なる言葉」の諸相であるといえよう。

宗教言語の翻訳の可能性は、「聖なる言葉」が、翻訳を通して、通時的かつ共時的に再生産されうるという可能性である。つまり、宗教言語の翻訳は、過去の啓示として固定化された原典に対して常に息吹をあたえる営みとなりえるのである。これは、「聖なる言葉」によって垂示された宗教的真理が、時代や地域を超越し、通時的共時的に蘇生されることを意味する。

そのような翻訳を成すために翻訳者は、通時的翻訳と共時的翻訳を同時に行うことになる。前号で指摘した通り、宗教言語の翻訳の場合、教学あるいは神学の要請と信任が必要であり、その解釈の拠り所を論理的に把持しなければならない。しかし、その解釈も時間という制約と、歴史という潮流の中に組み込まれており、さらには、教学あるいは神学の発展に伴い、常に相対的なもので絶対的とはなりえない。スタイナーは、翻訳者のこのような境遇について次のように論及している。

> 翻訳に携わる人の仕事といえば、相反する二つの要素をもっている：すなわち、原文を忠実に複製しなくてはならないという衝動と、同時に、然るべき形で自らの力による創造をも行いたいという気持の昂まりとがそれで、翻訳をする人はこの両者の間の厳しい緊張関係の最中で活動してゆくわけである。つまり、翻訳家は他に比類のない形で言語の進化の歴史そのものを自ら〈体験〉する、すなわち言語と世界との間、より正確には〈さまざまな言語〉と〈さまざまな世界〉との間の関係に見られる、相反する価値観の共存を〈体験〉することになる。（スタイナー，亀山訳，2009:419）

宗教言語の翻訳に関しては、上述のような翻訳者の体験は、「聖なる言葉」を追体験しようとする信仰者の実存的欲求に根差している。そして、それは「聖なる言葉」とその教えを信仰するすべての信仰者の精神活動全般に関わる体験に類似する。そのような体験は、救済という究極目標に向かう永続的な営みでなければならない。なぜなら、原典の言葉は、常に過去のものであり、信仰の営みとしての通時的かつ共時的な翻訳によって創造的に再生され、生の言葉として自身の内によみがえり、また人々の拠り所ともなりえるからである。

> 明らかに翻訳は、どんなに良い翻訳であっても、原作にとってはいささかの意味ももちえない。にもかかわらず翻訳は、原作の翻訳可能性のゆえに、原作ときわめて密接に関連する。（中略）生の表出が、生者にはいささかの意味もなくても、生者と密接きわまる関連を持っているように、翻訳は原作から出現してくる。たしかに原作の生から、というよりはむしろ、その〈死後の生〉からだけれども。じじつ翻訳は、原作のあとに出る。そして、成立の時期には選ばれた翻訳者を決して見出すことがない重要な諸作品にあっては、翻訳は、作品の死後の生の段階を表示するものとなる。（ベンヤミン，野村訳，1994:72）

自らも翻訳者として翻訳に向き合ったベンヤミンは、「翻訳者の課題」という論稿において、上述の〈死後の生〉という独特な表現をもって原典と翻訳の関係をとらえている。彼は、「翻訳において原作は、いわば言語のより高次でより純粋な気圏の中へ伸びてゆく」（ベンヤミン，野村訳，1994:79）とも述べ、隠れた種子が熟していくように、翻訳により原典が時空を超越して段階的に生長すると考えている。このように、過去に啓示された「聖なる言葉」を、永遠なる〈死後の生〉として蘇生させ、普遍化を図る営みは、翻訳という不断の更新と変容にこそ見出せるとベンヤミンは指摘している。

［引用文献］
ヴァルター・ベンヤミン（野村修編訳）「翻訳者の課題」『暴力批判論他十篇』岩波書店、1994 年。
ジョージ・スタイナー（亀山健吉訳）『バベルの後に（上）』 法政大学出版局、1999 年。
ジョージ・スタイナー（亀山健吉訳）『バベルの後に（下）』 法政大学出版局、2009 年。